

らず、精緻な「手仕事」の成果であるアジアの工芸雑貨や民族衣装に対して向けられる外部からのまなざしは、その製作に「注がれた時間と労働がそのモノを特別な存在にする」という発想に導かれ、家族への思いや愛情の表現であるという平板な解釈と結びつくことが多い。だが、本書が説得力をもって描き出しているように、労働に追われ、経済的にも厳しい状況下で自ら日常着を手作りするしかなかった時代から、威信財や潜在的商品としての価値を得た衣装の一部を手作りすることに意味が見いだされる時代、さらに衣装に自ら刺繍を施すことが必ずしも女性としての「賢さ」を表現しなくなりつつある時代への転換を通じて、母たち、娘たちはさまざまに衣装との向き合い方を講じてきた。そこには紋切り型の惹句には回収されえない動態がある。

1点、本書で必ずしも十分に取り上げられていないように見えるのは、衣装の着用の場面である。もはや日常着ではなく礼服の扱いを受ける民族衣装を儀礼や節日にまとうとき、女性たちはどの衣装をどういう理由で選択し、お互いにどのような評価をしようのか。本書冒頭でもふれられている布の物質性に着目するならば、衣服の構成や製作過程、技術の修得等の問題に加えて、着心地や手触り、重みといった側面も重要な議論の契機となりうるのではないかと感じた。

また、全体に読みやすい文章であったが、あえて注文をつけるとすれば、こうした「衣装と生きる」女性たちの具体的描写と、中国社会全体や少数民族を取り巻く社会経済的状况の変化、政策の変遷といった俯瞰的な背景記述との往還の中で分析を進めていく記述スタイルにもうひと工夫ほしかったように思う。自分が作った衣装の売却を拒む妻、売却を前提とした衣装製作に抵抗を覚えつつも、いつか売る必要があるかもしれないという見込みのもとにデザインを決定する女性、漢族男性との結婚によって衣装とのつながりを断つ娘——このようにアンビバレントな状況を生きる女性たちの姿が随所に示され、興味をかきたてる一方で、それらがもう一つ太い糸に結びあわされていないような感覚を覚え、いささかもどかしかった。オールカラーで多くの写真を添え、章の間に

コラムを配置したり、巻末に読書案内を加えたりするなど、より広い範囲の読者を意識した仕掛けを凝らした本書だからこそその感想である。

(中谷文美・岡山大学大学院社会文化科学研究科)

安藤和雄(編著)、『東ヒマラヤ——都市なき豊かさの文明』京都大学学術出版会、2020、xxi+537p.

本書が対象とする東ヒマラヤは、ブータン王国東部とインド北東部のアルナーチャル・プラデーシュ州(以下、AP州)からなる。ヒマラヤ山脈東部がブラマプトラ川の河谷平野に南面するこの地域は、東アジアの照葉樹林帯の西端としても知られ、植物学や農学分野の研究者にとっては、ぜひ一度は訪ねてみたいところである。ただ、本書でも詳述されたように、入域制限があつて外国人研究者にほとんど門戸が閉ざされた地域であった。

その地域に編者たちのチームが入り現地の大学と共同調査を開始したというニュースを知ったのはもう15年ほども前のことかと思う。科学研究費補助金による「環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究」のメンバーとして編者らがまず2003年にアッサム州やマニプル州に入り、その後AP州を訪問している。また、編者が代表者の科学研究費補助金による「ブラマプトラ川流域地域における農業生態系と開発——持続的発展の可能性——」が2005年度から2008年度まで実施され、AP州でも調査が継続された。

さらに幸運なことに、これらと並行して本書第2章の医学班の調査を率いた奥宮清人(以下敬称略)がリーダーとなった総合地球環境学研究所(地球研)のプロジェクト「人の生老病死と高所環境——『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」が2005年度から始まった。アンデス高地とヒマラヤ高地を対象に人の高地適応を解明しようとするこのプロジェクトは2012年度まで実施され、編者も参加してAP州での調査にさらに多くの研究者が参入した。

これらプロジェクトに参加したメンバーは、順次、その調査報告を『ヒマラヤ学誌』に公開した。

そして、2007年から2019年にわたって同誌に掲載された報告をベースに、東ヒマラヤを「都市なき豊かさの文明」をもつ地域として紹介し、その「文明」の現代的意義を提示しようとするのが本書である。その狙いは編者による「はしがき——東ヒマラヤ地域研究の意義」（書き下ろし）と「序章 高地文明論と農村文明論」（初出は、『ヒマラヤ学誌』第10号、2009年）で論じられている。

続く本論は、おもに『ヒマラヤ学誌』に掲載された報告と新たに書き下ろされた数編からなり、それらが「第I部 生業——農耕、牧畜と生態環境」「第II部 身体——食文化と医学的特徴」「第III部 精神——高所の宗教文化」「第IV部 近代——土地利用、グローバリズムと変容」の4部に編成された。

第I部では4つの章（1 「高地文明」としての東ヒマラヤ：安藤和雄、2 高所ヒマラヤの地勢的特徴と現代：宮本真二、3 ミタンの利用と高所世界：川本芳・タシ ドルジ・稲村哲也、4 焼畑から換金作物へ、そして……：赤松芳郎〔数字は章番号、各章の副題は省略。以下、同著者の場合は姓のみ〕）と3つのコラム記事（1 アルナーチャル・プラデーシュの生業景観：竹田晋也、2 乳の利用から見る東ヒマラヤの文化：稲村、3 東ヒマラヤの植物に魅せられて：小坂康之〔数字はコラム番号〕）が収録されている。いずれも野外観察やインタビューを通じて得られた調査結果で、東ブータンとAP州西部にまたがって居住するモンパと呼ばれる人々の農業や牧畜の特徴とその変容を紹介する。

第II部は、AP州西部の高地住民モンパの生活習慣病や食事・栄養摂取状況に関する調査の経緯とその結果を紹介する3つの章（5 健康と高地文明：石本恭子、7 モンパ族の食事：木村友美、8 高地生活習慣病モデルからみたモンパの高齢者：奥宮清人）と、ブータン王国での地域医療・保健の普及に携わるビレッジヘルスワーカーの制度導入を扱った1章（6 ビレッジヘルスワーカーたち：坂本龍太）からなる医学班の調査・研究成果である。生身の身体が対象となるだけに、現地での調査・検診活動を実現するまでの経緯が綴られて興味深い。

第III部は、東ヒマラヤ各地の宗教や信仰およびその儀式・儀礼などをあつかう4章（9 モンユルの仏教：奥山直司、10 「森のチベット」における自然信仰の聖地：小林尚礼、11 モンパ民族地域に見られる「悪霊」と儀式：水野一晴、12 焼畑耕作と在来信仰：トモ リバ・安藤・小坂）と1つのコラム（4 ブータンの仏教：奥山）からなる。モンパが住むAP州西部のタウン地区やディラン地区の仏教史（第9章）、これら両地区の仏教や自然信仰の聖地訪問記（第10章）、チベット仏教やボン教とシャーマニズムが混交した悪霊を祓う儀礼の紹介（第11章）など、いずれもチベット由来の宗教と信仰の重みを伝える貴重な報告が第III部に収録されている。ちなみに、第III部では、この3つの章がモンパ居住域（ブータン東部やAP州西部）を対象とした報告である。

一方、第12章はAP州東部のタニ・グループと総称される人々の在来信仰と焼畑儀礼を紹介する。AP州東部に特化した報告は、本書では焼畑を対象としたこの第12章と森林・農業景観や土地利用を概観した第I部のコラム1に限られており、AP州東部も含めた東ヒマラヤ全域を扱う章やコラムも農業や森林、植物に関心のある研究者による報告（コラム3や後述の第14章と最終章）が多かった。調査参加者の専門分野に応じてテーマを絞り込んだ共同調査がモンパ居住域で行われた一方で、自然景観や土地利用に関心のあるメンバーはAP州東部を含む広域の野外観察を中心に調査を行ったことが本書の構成からもうかがえる。

第IV部では、対象となる時代や地域はさまざまであるが、ブータン王国とAP州の自然、環境、経済、社会の変容をテーマとした4章（13 陸封された地域の「解放」：河合明宣、14 東ヒマラヤの植生に刻まれた歴史：小坂、15 東部ヒマラヤにおける土地開発史：宮本・安藤・アバニィ クマール バガバティ・ニッタノンダ デカ・トモリバ、16 ブータン極東部の牧民社会とその変化：稲村・川本）と3つのコラム（5 マクマホン・ラインと東ヒマラヤ：河合、6 東ヒマラヤ南面の森林保全と農業環境：河合、7 牧畜民と社会発展：リンチン ツェリン ドウンカルパ・安藤・小坂）が収録されている。

各報告が扱うテーマやトピックは多岐にわたるが、「終章に代えて 西南シルクロードと焼畑の水田稲作からひもとくヒマラヤ東部——3次元的な地域体系研究の端緒として」では、チベット=ビルマ語族のAP州のアパタニ族と同語族の中国雲南省ハニ族との比較農耕論的考察から西南シルクロードを経由した古くからの人の交流とネットワークが東ヒマラヤを形成したとする編者の仮説が提示される。

以上が構成と内容であるが、本書通読後の印象をまず記しておこう。冒頭に「ぜひ訪ねてみたいところ」と述べたが、当然とはいえ、もはやAP州も時代とともに大きく変化していることを本書から実感させられた。研究者に閉ざされていただけで、それを「秘境」「あこがれの地」¹⁾ などというのは研究者側の思い入れに過ぎないことをあらためて学ぶことができた。そのうえで、いくつかの疑問を呈して、本書の批評としたい。

まずは、編者が東ヒマラヤを読み解くための分析枠組みとして序章で提起した「在地ニッチ」と「文明ニッチ」についてである。編者によると「在地ニッチ」は「高地から低地にわたる暮らしの場」で、「文明ニッチ」は「上部構造=国家・地方・地域の制度」となる。前者は地域の基盤としてある自然・生態的環境、そして後者はその地域を覆う制度的システムとも言い換えられよう。ただ、それがなぜ「在地」なのか、あるいは「文明」なのか、そしてさらにはなぜその二つが「ニッチ」なのか分かりにくい。分担執筆者のなかでもこの二つの用語が十分に共有できなかったのではないかと想像される。

「在地」は編者自身が地域を理解するための鍵概念としてすでに使用しており、端的には「在地の知」と表現されたように、人々が「その地域に在

る（在り続けてきた）こと」を重視する立場を表明した言葉であると評者は理解している。ところが「在地ニッチ」というように、自然や環境、生態、資源などの条件あるいはその状態、さらにはそれらの賦存状況の大小を測る指標であるかのように使われると、編者が紡いできたその言葉のもつ重みが貶められはしないかと案ずるのである。

二つ目は、東ヒマラヤという地域を「モンパ・モデル」という高地-低地間のネットワークモデルで一つにくくることの当否に関する疑問である。このモデルは、東部ブータンとAP州西部のモンパ居住域の調査に基づき構想されたが、本書ではあまり事例として取りあげられなかったAP州東部にも当てはまるのであろうか。

例えば、コラム1では、AP東部の調査に同行したアパタニ出身の案内者が、調査後に、シアン溪谷（ブラマプトラ川の上流域で、大屈曲点の下流）での厳しい滞在経験を振り返って“*Apatani is civilized*”と語ったという逸話が紹介されている（p. 117）。同じタニ・グループであっても、西のアパタニからみれば東のシアン川沿いの人々の暮らしが *less civilized* と映ったのであろう。では、さらに西に住むチベット文明をまとったモンパの人たちにはタニ・グループの人々がどう映っているのであろうか。また、同じコラムで、かつてはシアン川沿いの村々では生活に必要な資源を巡って激しい村落間の争いがあり、その戦いに戦士として参加した経験と記憶が紹介されている（p. 111）。備忘録ともいえる調査ノートの短い記載であるが、こうした記載から、チベット文明が覆う西部とその影響が薄らいでゆく東部の両地域に区分して東ヒマラヤを理解することも可能なように思われる。

稲村哲也や川本芳らの牧畜に関する報告（第3章、第16章）に倣えば、ヤクに象徴される西部（高地）とミタンに象徴される東部（低地）というような対比も可能であろう。さらには、「森のチベット」とも言われる丘陵地で行われる落葉樹を活用した農法や竹の利用などから、AP州東部はブラマプトラ川東南方のナガラドなどと生業や文化を共有し、東南アジア大陸部山地の「ゾミア」と名づけられた地域との共通性をもつようにも思えるのである。

1) 地球研プロジェクトの中間報告書（奥宮清人編『生老病死のエコロジー』昭和堂、2011年）に編者らの報告「東ヒマラヤのあこがれ地、アルナーチャル・ブラデーシューその魅力と現代文明への問いかけ」が第3章として収録されている。この時点で、本書副題の「都市なき豊かさの文明」というとらえ方がすでに芽生えていたことがこの標題からもうかがえる。

最後に指摘したいのは、「終章に代えて」で展開された雲南省ハニ族の棚田稲作とアパタニの稲作の比較から推論された東ヒマラヤの地域形成に関する編者の新たな仮説への疑問である。よく似た稲作技術があるからといって、それを関連付けるためには注意とそれなりの手続きが必要であろう。ブラマプトラ川の平野部にはタイ系のアホムが古くから居住しており、彼らとの交流も考える必要がある。

分担執筆者の一人である竹田晋也が、地球研プロジェクトの報告書（脚注に記載の報告書 p. 215）で、「オアシスのチベット」「草原のチベット」「森のチベット」に3区分されるチベットを、①進化の時間、②文化の時間、③経済の時間、換言すればそれぞれ自然史、生態史、経済史の時間スケールで考える必要性を記している。それに倣えば、②と③の時間スケールを設定したうえで、あらためて東ヒマラヤの地域形成をまとめる「終章」が必要ではなかったかと悔やまれる。同じく竹田は、本書のコラム1（初出は、『ヒマラヤ学誌』8号、2007年）でプロジェクトが取り組むべき今後の研究課題を列記している（pp. 118-120）。いずれも②と③の時間スケールにそった環境史や土地利用史に関する課題である。共同調査のごく初期に掲げられたこの課題に沿って調査が組織され継続されていれば、ずいぶんと内容が違った「終章に代えて」が登場していたのではなかろうか。

いくつか疑問を呈したが、まだ知られていないことがいっぱいあるのが東ヒマラヤである。そして、インド、チベット、東南アジア、中国の文明と文化そして政治が交錯する複雑な地政学的位置ゆえに、これからも大きく変化していく地域でもある。編著者がさらに調査を続け、遠くない未来に本書の続編が出るのを期待したい。

（田中耕司・京都大学名誉教授）

佐久間香子、『ボルネオ 森と人の関係誌』
春風社、2020、352+xxxivp.

ボルネオ島のマレーシア・サラワク州のある在地民コミュニティの過去と現在を連続性と断絶の

両面から描こうとした野心作である。

まずは読みやすい文章であることに感心した。情景描写なども通常の日本人による、とりわけ博士論文公刊としての民族誌のレベルを超えていて、変な言い方だがアメリカ人の書く民族誌のような印象を受けた。専門研究者のみならず幅広い読者を想定して、現地状況の背景的説明を多く付している点も、そうした印象に寄与している。

ボルネオと大きく唱ってはいるが、本書で記述と分析の対象となっているのは、その北西部のサラワク、しかもその北部、バラム川中上流域である。この地に住む人びとを著者は「森の民」という言葉で言い表す。森が狩猟採集の場であり焼畑耕作のための土地を提供するという意味で人びとのサブシステム（自給活動）の日常的な源であると同時に、彼らの経済と政治をよりダイナミックに展開させてきた交易活動のための財の産出現場でもあるからだ。彼らのことをまた「プナン人の『隣人』であり、……プナン人の『影』となった」（p. 71）と表現しているが、これは今日の社会状況を簡潔に表す的確な比喩となっている。

本書はいいねいに書かれた良質の「歴史」民族誌であり、サラワクの社会、政治、歴史的な背景を幅広く説明している点で、親切さの目立つ本となっている。1841年から実質100年にわたって現在のサラワク州にあたる領域を統治したブルック国家についての説明は、一般読者に有益であろう。ブルネイ後背地としての対象地域社会の19世紀をとおしての政治的、経済的位置づけの記述は、その多くをP・メトカーフの著作[Metcalf 2010]に負っているが、その良い要約にもなっていて、探索の導きの糸として理にかなった役割を果たしている。ここでの「森」と「人」は、評者が慣れ親しんだサラワク南部の森と、それに関わる人間活動とは大きく異なるところがある[内堀 1996]。その相違のためあって、評者にとってこの書評書きは存外の楽しみとなった。

全体構成は序章と終章を含む全11章からなり、番号のついた9つの章は2部仕立てになっている。「森の総合商社——交易拠点としてのロングハウス・コミュニティの形成」と題する第1部（1章か